

2025年度 3月修了 修士論文

スケートボードスクールを通じて 癩癩症状が改善した事例

- その改善要因の探索 -

"A case study on the improvement of tantrum symptoms through
participation in a skateboard school"

- Exploration of contributing factors -

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
健康スポーツマネジメントコース

5024A301-5 今泉睦

研究指導教員 中村好男 教授

目次

第 1 章	背景	1
第 1 節	スケートボードの歴史	1
第 2 節	スケートボードのスポーツ化	2
第 3 節	スケートボードの人気	3
第 4 節	スケートボード人気の背景	5
第 5 節	スケートボード文化の社会的特性	6
第 6 節	スケートパークの現状	6
第 7 節	川崎競輪パークが出来た経緯	7
第 8 節	スクールの生徒	8
第 9 節	技術の習得	8
第 10 節	仲間関係	9
第 11 節	発達障害について	10
第 12 節	研究の目的	11
第 2 章	研究方法	12
第 1 節	研究対象	12
第 2 節	期間	12
第 3 節	手法	12
第 4 節	技術習得プロセス	12
第 3 章	結果	13
第 1 節	A の泣く癩癩について	13
第 2 節	技術面において	13
第 3 節	行動	14
第 1 項	A に対する仲間の行動	14
第 2 項	A の行動	14
第 3 項	仲間との応援	15
第 4 節	継続した家族の応援	15
第 1 項	家族の応援	15

第2項	家族の応援 アンケート	16
第4章	考察	17
第1節	先行研究	17
第1項	泣く癩癩症状の先行研究	17
第2項	ポジティブな行動強化	17
第3項	代替え行動の指導	17
第4項	社会的つながりの活用	18
第5項	先行研究まとめ	19
第2節	スケートボード文化と癩癩行動改善における可能性	20
第1項	スケートボードと癩癩行動	20
第2項	スケートボードと子どもの成長	20
第3節	諦めずに挑戦を繰り返すこと	21
第4節	仲間とのコミュニケーション増加と集団のまとまり	23
第1項	集団凝集性の定義とスケートボードスクールにおける役割	23
第2項	仲間との関わりの変化とその影響	23
第3項	集団のまとまりを強化する要因	24
第4項	まとめ	25
第5節	継続した家族の応援	25
第1項	家族の応援がAの情動安定に与えた影響	25
第2項	母親の応援スタイルの変化	25
第3項	父親の関与と情動の安定	26
第4項	家族の継続的な応援がAの情動調整に与えた影響	27
第5章	結論	28
謝辞	29
参考文献;	30

図表目次

表 1	通常学級に在籍しているが、発達障害の疑いのあると考えられる児童数	10
表 2	川崎市内一校あたりの発達障害の疑いのある児童数の平均値	10
表 3	技術習得プロセス	12
図 1	泣く・癩癩の推移表	13
図 2	カテゴリー別・練習日数	14
図 3	A 及び A に対する仲間の行動	15
図 4	家族の来場時変化	15

第1章 背景

第1節 スケートボードの歴史

スケートボードの起源は、1950年代のカリフォルニア州に遡る。もともとサーフィンが盛んな地域では、波のない日にも陸上でサーフィンの感覚を味わうために、サーファーたちが木製のボードにローラースケートの車輪を取り付けた遊びが広がっていた(Borden, 2019)。これが「サイドウォーク・サーフィン」として人気が高まり、商業的なスケートボードの製造が開始された。

1959年には Roller Derby 社が初めて商業的なスケートボードを販売し、それに続いて Makaha や Hobie といった企業がスケートボードの量産を開始した。これにより、スケートボードはサーフィン愛好者だけでなく、一般の若者にも普及し始めた。1960年代にはスケートボードが急速に普及し、全国的な流行となった。この時期には競技大会が初めて開催され、スケートボードがスポーツとしての側面を持つようになった。特に、1965年の「National Skateboarding Championships」（全米スケートボード選手権）は、スケートボードのスポーツ化の始まりだった。しかし、当時のスケートボードは技術や安全対策の不備が問題となり事故が多発し、1970年代に入ると一時的に人気が低迷することとなる（Borden, 2019）。

1970年代には、スケートボードの技術革新が大きく進展した。1973年には フランク・ナスワーシーによって ウレタン製ホイール（Cadillac Wheels）が開発され、それまでの金属や粘土製ホイールに比べて格段に滑走性能が向上した。カリフォルニアでは、干ばつの影響で水の抜かれたプールがスケートボーダーたちの遊び場となり、ここで ヴァーティカル・スケート（ボウルやランプを活用したスタイル）が生まれた（Borden, 2019）。また、1978年には アラン・ゲルフアンド（Alan Gelfand）が オーリー（Ollie）を発明し、スケートボードがさらに進化した。

1980年代には、スケートパークにおいては、以下の問題が発生した。スケートパークは、訴訟問題や保険費用の高騰に直面し、多くが閉鎖に追い込まれた。この時期、スケートボードの人気が再燃し、スケートパークの需要が高まっていたにもかかわらず、運営者は法的リスクや経済的負担に対応できず、結果として多くの施設が閉鎖された。この状況は、スケートボード文化の発展に大きな影響を与え、スケートボーダーたちはスケートパークでの活動が困難になり、都市の公共空間（階段、手すり、縁石など）を活用するストリートスケートへ移行していった(Anthony Pappalardo, 2020)。この時期、スケートボー

ドは反体制的な若者文化、いわゆるカウンターカルチャーの象徴となり、「Thrasher Magazine」や「Transworld Skateboarding」といった専門誌が創刊され、スケートボード文化の情報発信とコミュニティ形成に大きく寄与した。

1990年代には、スケートボードは再び人気を取り戻し、特に X Games（1995年開始）の影響を受けた。また、スケートボードブランド（Element, Plan B, Zero など）が急成長し、ストリートファッションや音楽（特にヒップホップ、パンク）と融合することで、若者文化の象徴としての地位を確立した。この時期には、スケートビデオが普及し、インターネットを通じてスケートボードの文化が世界中に拡散した（Borden, 2019）。

2000年代以降、スケートボードは主流のスポーツとしての地位を確立し始めた。2016年、国際オリンピック委員会（IOC）は、2020年東京オリンピックでスケートボードを正式種目として採用することを決定した。この決定は、若者層の関心を引きつけるためのものであり、スケートボードの国際的な認知度と地位を大きく向上させた。（Wheaton & Thorpe, n.d.）

2021年の東京オリンピックでは、スケートボード競技が初めて実施され、若い選手たちが活躍した。その後、2024年のパリオリンピックでもスケートボードは継続している。

第2節 スケートボードのスポーツ化

1990年代には、Xゲームズ（1995年開始）などのエクストリームスポーツイベントが注目を集め、スケートボードが若者文化の中心的な位置を占めるようになった。日本人スケートボード初金メダルは、2017年芝田モト選手だ。特にテレビ放送を通じて、スケートボードの競技性が世界中に広がり、国際的な認知が進んだ。この頃、スケートボードの国際的な統ルールや組織の必要性が高まり、2002年に International Skateboarding Federation（ISF）が設立され、国際大会の運営やルール整備が進められた。一方で、スケートボードのオリンピック正式競技化への動きは2000年代に本格化した。2007年、国際ローラースポーツ連盟（FIRS）はスケートボードをローラースポーツの一環として IOC に提案。これは、スケートボードのスポーツ化が進む中、オリンピックへの採用を目指す重要な一歩となった。しかし、当時の IOC はスケートボードをローラースポーツの一部としてではなく、独立した競技として認識する必要性を感じていたため、FIRS の提案は採用されなかった。その後、ISF が IOC と直接協議を重ねることで、スケートボードの独立性が認められるようになった。特に2014年の南京ユースオリンピックでスケートボードがショーケースイベントとして採用されたことは、オリンピック正式競技化に向けた重要な

契機となった。このイベントでは、若者層の支持を得るための戦略としてスケートボードの魅力が評価され、IOC 内での支持が広がった。

2015 年、IOC は「Agenda 2020」という改革案を採択し、新しいスポーツの追加が推進された。この方針に基づき、スケートボードが 2020 年東京オリンピックの追加種目として提案されることとなった。この提案は、若者文化を取り込むことでオリンピックの魅力を高めるという狙いがあった。2016 年 8 月、リオデジャネイロでの IOC 総会において、スケートボードを含む 5 つの新種目が正式に東京オリンピックで採用されることが決定された。スケートボードのオリンピック競技化において重要な役割を果たしたのが、World Skate (旧 FIRS) と ISF の統合である。2017 年、これらの組織が統合され、新たに World Skate としてスケートボードを国際的に管理する体制が整えられた。この統合により、オリンピック競技としてのスケートボードの運営が一元化され、競技ルールや選手の育成が制度化された。

2021 年の東京オリンピックでは、スケートボードがストリートとパークの 2 種目で初めて実施され、日本からは堀米雄斗や西矢椛といった選手がメダルを獲得し、大きな話題となった。この成功は、スケートボードの競技性や文化的価値が世界的に認知される契機となり、国内外での競技人口の増加やスケートパークの整備など、競技環境の向上にもつながった。

以上のように、スケートボードがオリンピック正式競技となった背景には、競技の制度化、国際組織の整備、そして若者文化を取り込む IOC の戦略的な意図があった。

第 3 節 スケートボードの人気

東京オリンピックでの日本選手の活躍により、スケートボードの人気が急上昇した。特に、堀米雄斗選手の金メダル獲得や、西矢椛選手、四十住さくら選手、開心那選手ら女子選手たちのメダルラッシュが大きな注目を集めた。これにより、スケートボードは新たなスポーツとして広く認知され、初心者向けのスクールや公園でのスケート活動、スケートパーク自体が増加した。

NPO 法人日本スケートパーク協会の調査によれば、2017 年には約 100 ヲ所だった公共のスケートパークが、2021 年には 243 ヲ所、2023 年には 434 ヲ所と急増している。この増加は、オリンピックでの日本選手の活躍が直接的な影響を与えていると考えられる。スケートパークの増加に伴い、スクールの数も増加している。SNS 上でも全国的にスクール

が増えているとの実感があり、キッズスケーターの数も確実に増えている。例えば、東京都江東区のスケートボード場では、オリンピック後に体験会や教室が盛況となり、多くの子どもたちが参加している(山田伸彦 & 井上雄太, 2021)。また、参加資格が小学生以下のスケートボードコンテスト「FLAKE CUP」では、東京オリンピック前の2020年には93名のエントリーだったが、2021年12月には196名、2022年には268名と、オリンピック前の約3倍にまで参加者が増加している。(中坂 優太, 2023) 技の習得過程で得られる成功体験が、子どもたちの自信や意欲を高める効果がある。元プロスケーターで理学療法士の中坂優太氏は、スケートボードが子どもの身体能力や精神力の向上に寄与すると指摘している。スケートボードは、バランス感覚や柔軟性、筋力の向上だけでなく、挑戦する心や集中力、自己表現力を育むスポーツとして注目されていると示されている。

地域社会への影響

スケートボードの人気上昇は、地域社会にも影響を与えている。例えば、名護市ではアーバンスポーツパークの基本計画が策定され、スケートボードの体験イベントやスクール事業が計画されている。沖縄県名護市では、アーバンスポーツパークの基本計画が策定され、スケートボードを中心とした都市型スポーツの振興が図られている。この計画では、スケートボードやインラインスケート、BMXなどのアーバンスポーツを楽しめる施設の整備が進められており、特にスケートボードの体験イベントやスクール事業が計画されている。これにより、地域住民や観光客が気軽にスケートボードを体験できる環境が整備され、スポーツを通じた地域活性化が期待されている。(名護市, 2023)

大阪府松原市では、「スケボーのまち まつばら」として、スケートボードを核としたまちづくり戦略が展開されている。市内には2つのスケートボード施設が整備されており、これらを拠点に地域活性化が図られている。特に、2023年4月には2つ目の施設である「おくさま印スケボーパーク」がオープンし、初心者から上級者まで幅広く利用できる環境が整えられた。このパークの開設に伴い、スケートボード大会「Street Sk8 Cup in Matsubara」が開催され、多くの参加者と観客が集まり、地域の賑わい創出に寄与している。さらに、パークの外壁には大規模なミューラルアートが描かれ、アートとスポーツが融合した新たな観光スポットとして注目を集めている。松原市は、スケートボードを通じて若年層への魅力発信と定住・定着の促進を目指しており、これらの取り組みが評価され、2022年11月にはスポーツ庁主催の「スポーツ・健康まちづくり優良自治体表彰(スポまち!長官表彰)2022」を受賞している。(毎日新聞, 2024)

第4節 スケートボード人気の背景

スケートボードは、個人の技術向上だけでなく、参加者同士が助け合い、共に成長する場を提供する活動である(Ben Bengtson, 2021)。この文化では、単なる技術の成功だけでなく、努力や創意工夫の過程が称賛される点が特徴的である(Josh MATLOCK, 2018)。スケートボードは公式なルールに縛られない「自由な自己表現」の場であり、失敗や成功を通じた社会的つながりを提供していると示している(Beal, 1995)。また、スケートボードが挑戦の過程とその物語を共有することで、社会的支持を得た背景があり、1990年代の「エクストリームスポーツ」ブームの中で、スケートボードが挑む過程とその物語を共有することで社会的支持を得た背景を強調している(Kyle KUSZ, 2004)。さらに、X-Games や DIY スケートパーク運動は、「挑戦の共有文化」を象徴している(Najeeb Tarazi, 2023)。これらのイベントでは、技術を成功させるまでの過程が映像として記録され、その物語が視聴者に感動を与える要素となっていると述べている。これにより、スケートボードは単なる競技ではなく、立ち向かう物語性を持つ活動として認識されている。心理学的な視点からも、この文化の影響が確認されている。自己効力感理論によれば、成功体験は個人の自信を高めるだけでなく、他者がそれを目撃し共感することで社会的承認を促進する(Evan CHARLES & Dr. Specht, 2023)。これをスケートボードに当てはめると、スケートパークでの努力の瞬間がスケーター間の絆を生み出し、意欲を維持する要因となることが示唆される。また、スケートボードが都市空間を「挑戦の場」として再解釈し、それを共有することで独自のアイデンティティと連帯感を形成している点が指摘されている(Borden, 2019)。さらに、スケートボードは都市空間における独自の文化を形成しており、スケートボーダーは都市の公共空間を積極的に活用し、独自の意味づけを行っている(Snyder, 2017)。このような活動を通じて、スケートボーダーは社会の一員としての自覚を持ち、他者との協調性やコミュニケーション能力を高めている。加えて、スケートボードは精神的および肉体的にハードなアクティビティであり、参加者は挑戦を通じて自己効力感を高めることができる(Evan CHARLES & Dr. Specht, 2023)。このプロセスで得られる達成感や自己成長は、個人の自信や社会的スキルの向上につながる。スケートボードは、個人の技術向上だけでなく、参加者同士が助け合い、共に成長する場を提供する活動である。この文化では、単なる技術の成功だけでなく、努力や創意工夫の過程が称賛される点が特徴的である。スケートボードは公式なルールに縛られない「自由な自己表現」の場であり、失敗や成功を通じた社会的つながりを提供している(Beal, 1995)。

第5節 スケートボード文化の社会的特性

スケートボードは、単なる個人の技術向上を目的とするスポーツではなく、参加者同士が助け合い、共に成長する場を提供する活動である。(Ben Bengtson, 2021)によれば、スケートボードは競技スポーツを超えたコミュニティを形成し、経験や成果を分かち合うことで独自の文化を生み出している。スケートボードは、個人の創造性を表現する場であると同時に、他者との協調を促進する手段ともなり得ると述べている。特に、スケートボードが自閉スペクトラム症 (ASD) の子どもたちに対してポジティブな影響を与えることが研究で示されている。(Thomas et al., 2016)研究では、スケートボードが ASD の子どもたちにとって、社会的なつながりを深める機会を提供することが明らかになっている。スケートボードを通じて、ASD の子どもたちは他者と自然に関わる機会を得ることができ、社会的スキルを向上させることができる。このことは、スケートボードが単なる競技ではなく、教育的・療育的な側面を持つことを示唆している。また、スケートボードは都市空間における独自の文化を形成しており、参加者は公共空間を積極的に活用し、独自の意味づけを行っている。(Borden, 2019)は、スケートボーダーが都市の建築物や空間を再定義し、通常の都市利用とは異なる形で活用していることを指摘している。スケートボードは都市のインフラを独自の視点で捉え、新たな価値を生み出す手段となっている。さらに、(田中研之輔, 2015)は、スケートボーダーが都市空間の「隙間」を見つけ出し、管理や排除の圧力を巧みにかわしながら活動していることを述べている。こうした側面から、スケートボードは都市の公共空間に対する新たな視点を提供し、都市の活性化に貢献していると考えられる。加えて、スケートボードは精神的および肉体的にハードなアクティビティであり、参加者は挑戦を通じて自己効力感 (self-efficacy) を高めることができる。(田中研之輔, 2003)は、スケートボーダーが身体的な痛みを伴う挑戦を繰り返すことで、自己成長や達成感を得ていると報告している。このプロセスで得られる成功体験は、個人の自信の向上やストレス耐性の強化につながる。特に、反復的な挑戦と失敗の経験を通じて、スケートボーダーは粘り強さや問題解決能力を養うことができる。この点は、スケートボードが単なる娯楽ではなく、自己成長を促すスポーツであることを示している。

第6節 スケートパークの現状

日本におけるスケートパークの現状は、近年大きな発展を遂げている。特に 2020 年の東京オリンピックでスケートボードが正式種目として採用されたことを契機に、公共スケートパークの数が急増している。NPO 法人日本スケートパーク協会の調査によれば、2024 年 5 月末時点で日本全国の公共スケートパークは 475 施設に上る。この数は、東京オリ

ピック開催前の2017年には約100施設であったことから、約7年間で約4.75倍に増加したことになる。特に、東京都内には32施設が存在し、関東地方全体では116施設と全国で最も多い(杉山功明, 2022)。

以下、(杉山功明, 2022)日本では1970年代に第一次ブームが到来し、各地にスケートパークが設置された。しかし、その後のブームの沈静化や施設の老朽化により、多くのパークが閉鎖された。2000年代に入ると、スケートボードの再興とともに新たなパークの設置が進み、特に東京オリンピックでの正式種目化が決定した2016年以降、自治体や民間による施設整備が加速した。現在、日本のスケートパークは都市部を中心に増加しているが、人口当たりの施設数には地域差がある。例えば、愛知県では約62万4千人に1施設と、全国平均に比べて少ない状況である。また、上級者向けの「競技志向」のパークは全体の1割程度であり、初心者や中級者が安全に練習できる環境の整備が求められている。さらに、公共の場でのスケートボード利用に関する条例や規制も各自治体で異なり、利用者と非利用者の間での理解促進やマナー向上が課題となっている。

一方、スケートボード発祥の地であるアメリカでは、スケートパークの数や文化的背景が日本とは異なる。2019年時点で、アメリカには約3,500のスケートパークが存在しており、日本の約8.8倍の施設数を誇る。また、アメリカのスケートボード競技実施人口は約887万人と推定され、日本の約22倍に上る。

第7節 川崎競輪パークが出来た経緯

川崎競輪パーク(以下、KKP)は、地域のスポーツ施設として新たな価値を創出し、地域コミュニティとスポーツ文化の発展に寄与している。元々は競輪施設として運営されていたが、競輪の集客力低下や地域のニーズの変化を受け、施設の新しい活用方法が模索されてきた。その結果、競輪場を再活用し、スケートボードやBMXなどのアクションスポーツを中心とした多目的施設へと変化した。

この施設が注目される背景には、東京オリンピックでスケートボードが正式種目に採用され、競技が一躍注目を浴びたことがある。特に、日本人選手がメダルを獲得したことが国内外で話題となり、スケートボードに対する関心が急速に高まった。この流れを受けて、KKPはスケートボードをはじめとするアクションスポーツの普及を目的に、初心者から上級者まで幅広く楽しめる環境を整備した。

KKPの特徴の一つとして、安全性を重視した設備設計が挙げられる。専用のスケートパークエリアは、技術レベルに応じたコースを提供し、初心者も安心して利用できる仕組み

となっている。また、イベントを開催し、地域の愛好者を引き寄せる場としても機能している。さらに、施設の活用は地域経済やコミュニティ活性化にも貢献している。近隣の商業施設や観光業との連携により、訪問者数の増加が周辺地域の経済効果をもたらしている。特に飲食店の売上げが伸びるなど施設運営が地域に与える影響が確認されている。

また、KKP は地域住民を対象にしたスケボー教室や体験イベントも展開しており、スポーツを通じて人々が交流する機会を提供している。これにより、施設は単なるスケートパークとしての役割を超え、地域社会におけるスポーツ文化の発信地としての存在感を高めている。

以上のように、KKP はスポーツと地域活性化を結びつける先進的な事例として注目されており、競技者だけでなく地域全体に利益をもたらす施設としての役割を果たしている(今泉 睦, 2024)。

第 8 節 スクールの生徒

KKP スクールでは、幼稚園児と小学生の男女がスケートボードを学んでいる。中には、発達障害の傾向が見られる児童も入会している。2023 年 1 月に入会した小学 1 年生の事例では、当初、泣く・癩癩の症状が見られたが、スクールでの継続的な活動を通じて、症状が改善した事例が見られた。(熊野 英一, 2020)は、スケートボードは親子で楽しめるスポーツであり、その活動は、子どもの自立心や勇気を育み、親子の信頼関係を深める効果があると指摘している。

スケートボードの人気上昇の背景(globalreserch9, 2024)には、オリンピックでの成功やメディア露出の増加、そしてその独自の魅力がある。これらの要因が相まって、スケートボードは子どもたちの新たな習い事(中坂 優太, 2023)やスポーツ活動として定着しつつある。

第 9 節 技術の習得

スケートボードの技術を習得する過程で得られる体験は、子どもたちの自信を育む重要な要素である。(Hiwot ABEBE, 2024)の研究では、エチオピアのスケートパークにおいて、若い女性たちが技術を磨き「自分にもできる」という感覚を得たことで、新たな挑戦

への意欲が高まった事例が報告されている。このような成功体験は、単なる技術の向上にとどまらず、精神的な成長にも寄与すると述べられている。

筆者は、川崎市において川崎競輪パーク（以降、KKP）スケートボードスクールを運営している。KKPスクールでは、スケートボードを通じて「できる」という感覚を育てている。特に、泣くことや癩癩が見られる子どもたちが、技術を成功させることで、次を目指している姿が観察されている。(Evan CHARLES & Dr. Specht, 2023)の研究によれば、成功体験は新しい目標を楽しむ意欲を引き出し、子どもたちの成長を促す力があるとされる。さらに、(久崎孝浩 & 石山貴章, 2012)の研究では、周囲の大人によるポジティブな働きかけが「自分是可以る」という感覚を強めることが示されている。

第10節 仲間関係

スケートボード活動を通じて他者と協力する力を育むことは、仲間関係の構築や感情の安定に寄与する(Thomas et al., 2016)と述べており、スケートボードが自閉症スペクトラム障害(ASD)の子どもたちにとって、社会的交流を深め、自分の可能性を発見する場として機能していることが示されている。また、(Hiwot ABEBE, 2024)の報告では、エチオピアのスケートパークにおける若い女性たちの技術習得が、自己肯定感を高め、新たな挑戦への自信を育む要因となっているとされる。(Becky Beal, 1995)は、「成功と失敗を共有し、努力を称賛する文化」が挑戦意欲の維持に寄与すると述べ、これらの研究から、スケートボードが単なる個人競技にとどまらず、コミュニティ形成の場としての役割を果たしていることが分かる。

KKPスクールにおいても、スケートボードを通じた子ども達の成長が観察されている。泣くことや癩癩といった症状を抱える男子児童が、仲間との自然な関わりを通じて感情をコントロールする力を育み、2年間で泣く・癩癩を起こす症状が改善した事例が確認された。このような環境では、技術の習得に加え、仲間との相互支援が重要な役割を果たす可能性が指摘されている。例えば、技術の成功時に仲間から肯定的な反応や称賛を受けることが、子どもたちの自信や新たな目標への取り組みを促進する要因となることが考えられる。

以上のように、スケートボードを取り巻く活動は、他者とのつながりや感情の安定を育む場として重要な役割を果たしている。また、KKPスクールのような環境では、仲間関係を築きながらの経験が、子どもたちにとって貴重な学びの場となる可能性がある。(新本惣一郎, 2012)は、小学生において、スポーツを長く続けることや、目的意識を持ち高いレ

ベルでスポーツを行うこと、練習頻度を多くすることが GSE(generalized self-efficacy)に大きく影響することが示されていると述べている。

第 1 1 節 発達障害について

以下、令和二年度(川崎市健康福祉局障害保健福祉部障害計画課, 2020)発表の資料による、発達障害児の可能性のある小学生の割合

表 1 通常学級に在籍しているが、発達障害の疑いのあると考えられる児童数

(川崎市健康福祉局障害保健福祉部障害計画課, 2020)

	小学校 n=73		中学校 n=31		特別支援学校 n=2	
	件数	%	件数	%	件数	%
10人未満	14	19.2	11	35.5	4人	50.0
10～19人	13	17.8	5	16.1	無回答	50.0
20～29人	11	15.1	4	12.9		
30～39人	3	4.1	3	9.7		
40～49人	4	5.5	2	6.5		
50人以上	12	16.4	2	6.5		
無回答	16	21.9	4	12.9		

表 2 川崎市内一校あたりの発達障害の疑いのある児童数の平均値

発達障害の疑いのある児童数	各範囲の平均人数を基に該当校数を掛け、総児童数を求める	総人数
10人未満	$(0+9) \div 2 = 4.5 \text{ 人} \times 14 \text{ 校}$	63
10～19人	$(10+19) \div 2 = 14.5 \times 13 \text{ 校}$	188.5
20～29人	$(20+29) \div 2 = 24.5 \times 11 \text{ 校}$	269.5
30～39人	$(30+39) \div 2 = 34.5 \times 3 \text{ 校}$	103.5
40～49人	$(40+49) \div 2 = 44.5 \times 4 \text{ 校}$	178
50人以上	最小値 50 人 $\times 12 \text{ 校}$	600
	57 校合計	1,402
	1 校平均	24.6

川崎市小学校数：118 校

川崎市児童数：75,261 人

1 校平均児童数：637.8 人

疑いのある児童 24.6 人/一校 ÷ 一校平均児童数 637.8 人 = 3.9%

川崎市においては、一小学校に 24.6 人、3.9%の発達障害の疑いがある児童が通学。

(川崎市総務企画局都市政策部統計情報課, 2024)

第 1 2 節 研究の目的

本研究は、川崎競輪パークスクールにおいて、泣く・癩癩を起こす小学生が、22 ヶ月間のスクールで、症状が改善した具体的要因を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究方法

第1節 研究対象

本研究の対象は、スケートボードスクール「KKP スクール」に通う A（9 歳、男子、現小学 3 年生、入会時は小学 1 年）である。A は、泣く・痙攣の症状を抱える。

第2節 期間

研究の観察期間は 2023 年 1 月から 2024 年 11 月までの 22 カ月間を実施した。

第3節 手法

実行した技術面の観察。A の行動と A に対し仲間の行動の観察。コーチへのインタビュー。スクール中の家族の変化並びにアンケートである。

第4節 技術習得プロセス

技術習得プロセスを 12 に分け、各段階での進捗を記録した。

表3 技術習得プロセス

	技術習得
1	スケートボード上で正しい位置に立つ
2	スケートボードに自ら乗る
3	スケートボードに乗ったまま進む
4	止まる、曲がる
5	プッシュ
6	安定とバランス
7	チクタク
8	ターン
9	ジャンプ&回転
10	プッシュスピードの向上
11	中程度の高さのセクションからドロップイン
12	高程度の高さのセクションからドロップイン

第3章 結果

第1節 Aの泣く・痙攣について

Aは、2023年1月に入会し、入会時は母親とスケートボードを共に行うため症状は無かった。2ヶ月目以降、6ヶ月目まで痙攣の症状が5回ほど続いた。また2回目以降18ヶ月目まで泣く症状を14回起こしていた。

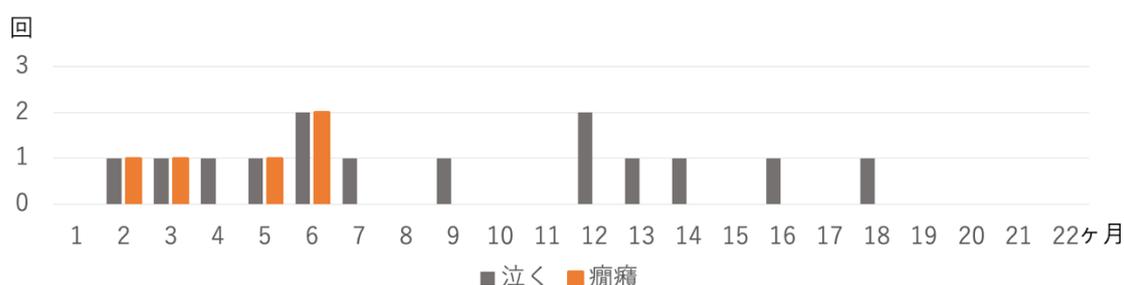


図1 泣く・痙攣の推移表

第2節 技術面において

技術面においての観察は以下である。Aは、2023年1月から2024年11月までに56回来場した。1しゃがむ～4曲がるまでが、スケートボード入門時の基本である。5プッシュ以降8ターンまでが、トリック（スケートボードの技）を行うための基本である。Aはプッシュが苦手だったため、56回中24回プッシュを取り入れた練習を行った。また、ターンに関しては、56回中25回行った。

Aには同時期に入会した同学年のBがいる。Bが一步上を歩み、Aが追いかける状態が続いていた。52回目のレッスンで、プッシュ&チクタク競争を行った。これまで一度もBに並んだことが無かったAが初めてBに勝利した。コーチの報告では、12ヶ月目までは、出来なかったり、苦手だったりする技術はすぐに泣いて諦め、練習継続が出来なかった。しかし、14ヶ月目以降は、苦手なプッシュを練習し、出来なくても諦めない姿勢でレッスンにのぞんでいたと聞いている。

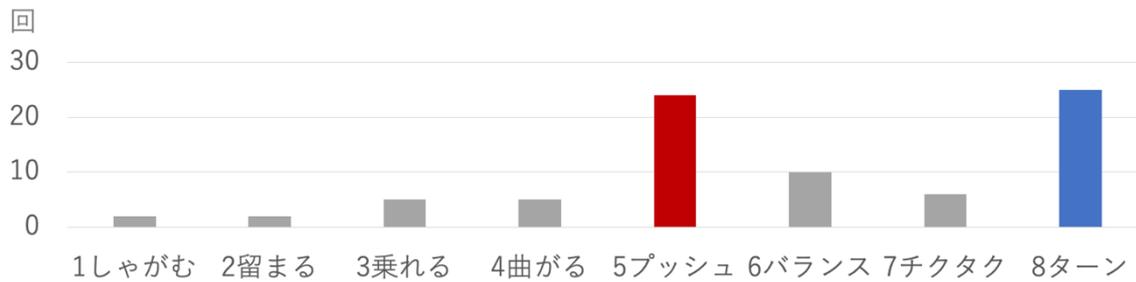


図2 カテゴリー別・練習日数

第3節 行動

第1項 Aに対する仲間の行動

6ヶ月目、12ヶ月目にAが思い通りに出来なく泣くことがあった。その際に同時期入会のBが「大丈夫、次はできるよ」とAを鼓舞した。また、18ヶ月目には、Aが得意なバランスをとるレッスン中に転倒し、出血しうずくまった。すると同じグループでレッスンをしていた仲間全員が集まった。血が出たとAが説明すると、生徒たちの傷の見せ合いが始まった。「俺は今日2ヶ所も血が出ているよ」「俺は血がこんなに出了よ」など互いの傷を比べ合い、誰が一番すごい傷か、誰が一番痛かったかなど数分話し、皆から「大丈夫だよ、スケボー出来るよ」と応援され、Aは泣き止みレッスンに戻ったとコーチから聞いている。

第2項 Aの行動

16ヶ月目レッスンが終わり、コーチが片付けを行なっていると、A自らが手伝いをしてくれた。これは今までレッスン終了後に無かった子どもの行動だった。するとこの手伝いが仲間達に派生し、生徒とコーチの後片付けが始まった。この日以降もAが中心となって後片付けは続くようになった。

またその2ヶ月後、下のクラスから後輩が上がってきた。その際に後輩は、コーチが指示した内容が出来なかった。するとAが歩み寄り、やり方を教えてあげると後輩は出来たのであった。Aは称賛し、応援していた。この18ヶ月以降、後輩のサポートを機にAは仲間皆を応援するようになった。「大丈夫、頑張れ」とポジティブな応援をすると、仲間皆も応援をするようになり、結果スクール内のコミュニケーション量が増加したとコーチから報告を受けている。



図3 A及びAに対する仲間の行動

第3項 仲間との応援

後輩に骨を教えることで、後輩が技をできるようになり、そして拍手を送ったことで後輩や仲間と交流が増えた。転んで出血し、仲間と傷の見せ合いや励ましをし合っているうちに、泣き止みレッスンに戻れた。一人の子がコーチの後片付けを手伝ったことで、周囲も集まり、皆で作業するようになった。技ができなかった子どもに対して皆で応援すると、その後仲間は成功した。

第4節 継続した家族の応援

第1項 家族の応援

Aの癩癩が6ヶ月目まで続いた。母親の叱咤激励の応援は、9ヶ月目まで続いた。7ヶ月目以降、癩癩は出ず、Aの症状が泣くだけになると、母親の応援は、笑顔応援に変わり現在に至る。15ヶ月目に父親が初来場し、Aは、父親が来場した際に泣く症状は起こさなかった。(※スクールは、親の応援方法に関与はしていない)

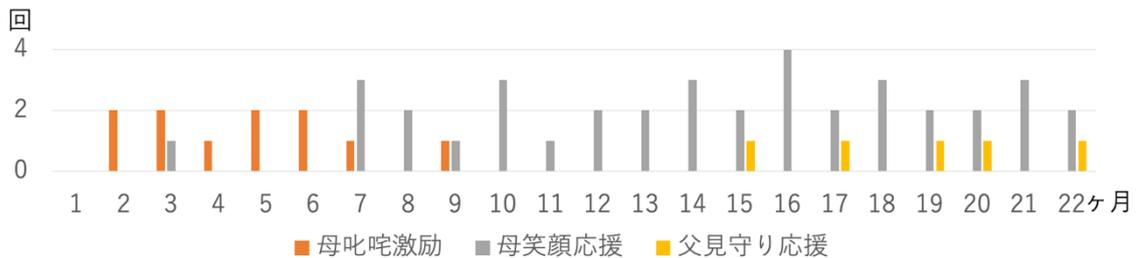


図4 家族の来場時変化

第2項 家族の応援 アンケート

父親との会話 2024/11/24

感情が安定した要因：1. **やめたくなったらいつでも辞めていい**

母親にアンケート 2024/11/25 & 会話 2024/12/15

感情が安定した要因：1. **仲間の応援 → 互いに「くん付け」が無くなった**

2. 夏休みの自由研究でもスケボーについて調べていたほど、好きなことに取り組めた(2024)

スケボーで変わったこと：

1. **痼癢が減った。**
2. 気持ちの切り替えが早くなり、**ポジティブ思考**になった。
3. 人の話を聞くようになった

第4章 考察

第1節 先行研究

第1項 泣く癩癩症状の先行研究

発達障害や情動調整の課題を抱える児童における「癩癩行動」は、教育現場や家庭環境において大きな課題となる。このような行動問題は、学習意欲の低下や社会的孤立を引き起こす可能性があり、早期の支援が必要とされる。当項では、癩癩行動の改善に成功した研究を基に、ポジティブな行動強化、代替行動の指導、社会的つながりの活用という三つのアプローチがどのように実施され、結果を生んだかを述べる。ここでは、(別府 哲, 2018)、(小野寺 謙, 2011)、(石塚 誠之, 2021)の研究を中心に取り上げる。

第2項 ポジティブな行動強化

(別府 哲, 2018)は、高機能自閉スペクトラム症の幼児を対象に、ポジティブな行動を強化することで癩癩行動を抑制するアプローチを示した。この研究では、子どもが適切な行動を取った際に即座に褒める、あるいは適切なフィードバックを与えることで、行動の肯定的な側面を強化した。また、学習環境を整えることで、情動調整(佐藤 幸子 et al., 2016)は、情動調整を情動の喚起を調節したり、不快の情動から来るストレスを軽減したりするような調節と定義し、促進させる効果も確認された。具体的には、感覚過敏などの特性を持つ児童が安心して活動できる環境を整備し、子どもたちが積極的に参加できるよう支援した。このアプローチは、癩癩行動が減少するだけでなく、子どもたちが新しいスキルを学び取る機会を増やした。さらに、家族との相互作用を促進し、情動の安定を図ることも、この研究の重要な成果として報告されている。

第3項 代替え行動の指導

(小野寺 謙, 2011)の研究では、癩癩行動を示す児童に対し、代替行動を教えることで情動の調整を図る手法が効果的であることが示された。この研究は、通常学級に在籍する癩癩行動を示す児童を対象としており、以下の三つのステップを中心に行動改善が図られた。目的の明確化、癩癩行動が発生する背景には、しばしば特定の目的が隠されている。例えば、他者の注意を引きたい、または自身の欲求を満たしたいといった動機がある。この研究では、まず教師が児童と対話を通じて癩癩行動の目的を明らかにした。このプロセ

スにより、教師は癩癩行動を表面的な問題として扱うのではなく、根本的な原因を理解することができた。代替行動の指導、癩癩行動を起こさずに目的を達成する方法を児童に教える具体的な指導が行われた。例えば、自分の気持ちを言葉やジェスチャーで表現する方法や、教師に直接助けを求める方法を練習した。これにより、児童は不適切な行動を取らずに目的を達成するスキルを習得した。適切な行動の強化、児童が代替行動を取った場合、教師や同級生がその行動を積極的に褒めることで、その行動を定着させた。褒めることやポジティブなフィードバックは、児童が新しい行動を継続する動機付けとなった。これにより、癩癩行動の頻度が減少し、適切な行動が日常生活の一部として取り入れられるようになった。これらの取り組みによって、児童は癩癩行動の代わりに自分の意図を適切に伝えるスキルを身につけ、クラス内での社会的つながりが強化された。同級生との協力関係も、癩癩行動の減少に重要な役割を果たしたと述べている

第4項 社会的つながりの活用

(石塚 誠之, 2021)は、発達障害児を対象とした癩癩行動支援プログラムを開発し、その効果を検証した。この研究では、特に「社会的つながり」の強化が癩癩行動の減少に大きく寄与することが示された。研究で使用された具体的な支援手法は以下の通りである。

代替行動の指導、癩癩行動として物を投げるなどの行為を示す児童に対し、言葉やジェスチャーを用いて自分の欲求を伝える方法を教えた。これにより、児童は不適切な行動ではなく、適切な手段で他者に自分の意図を伝えるスキルを習得した。成功時の強化、適切な行動が取れた場合には、教師や保護者が褒める、あるいは小さな報酬を与えることで、行動を強化した。このプロセスにより、児童は新しい行動を繰り返す動機を得ることができた。自己調整方法の指導、癩癩が発生しそうな場面で深呼吸やカウントダウンなどの具体的な自己調整スキルを教えた。これらの方法は、児童が自らの情動をコントロールし、不適切な行動を抑制するための効果的な手段となった。この研究では、社会的つながりが癩癩行動の減少に果たす重要な役割も確認された。例えば、児童が家族や友人とのポジティブな相互作用を通じて適切な行動を選択する機会が増えた。また、教師や保護者が一貫して行動支援を行うことで、児童はより安定した情動調整を実現することができた。これらの支援プログラムの結果、対象児童において癩癩行動の頻度が著しく減少し、適切な行動を取る能力が向上したことが確認されている。また、ジェスチャーや言葉を用いたコミュニケーション能力の向上により、家族や支援者との関係が大きく改善したことが報告されている。これにより、児童は情動の安定を図りながら、社会的なつながりを深めることが可能となった。

第5項 先行研究まとめ

共通点と総括、これら三つの研究、(別府 哲, 2018)、(小野寺 謙, 2011)、(石塚 誠之, 2021)は、泣く癩癩を改善するための以下の共通したアプローチを強調している。

1. ポジティブな行動の強化

適切な行動を促進することで、癩癩行動に代わる行動を育む手法が採用されている。褒める、報酬を与えるなどの積極的なフィードバックは、児童の行動をポジティブに変えるために重要な役割を果たしている。この際、情動調整が果たす役割について、(佐藤 幸子 et al., 2016)は、「情動調整とは、感情を適切に認識し、それをコントロールするプロセスであり、この能力が育つことで、不適切な行動を減らすことが可能となる」と述べている。ポジティブな行動を強化することは、この情動調整能力の育成を促進するための重要な要素である。

2. 代替行動の指導

癩癩行動の代わりとなる具体的な行動を児童に教えることで、情動の安定を図ることができる。これには、言葉やジェスチャーを用いた自己表現方法を教えることや、適切な行動を取った際の強化が含まれる。このプロセスにより、児童は不適切な行動を減らし、適切な行動を定着させることが可能となる。さらに、(佐藤 幸子 et al, 2016)は、適切な行動を取る際の成功体験が、情動調整の発達に寄与するとしており、これが新たな試みや達成目標を楽しむ意欲へとつながることを示唆している。

3. 社会的つながりの活用

仲間や家族とのポジティブな相互作用が、情動調整において重要な役割を果たすことが明らかになっている。友人や家族との関係性が改善することで、児童は情動を適切にコントロールできる環境を構築することができる。この点について、情動調整能力の発達には、社会的相互作用の中でより効果的に育まれると指摘されている(佐藤 幸子 et al, 2016)。具体的には、スケートボードや集団活動の中での成功体験が、情動調整能力を育てる場となることが考えられる。

これらのアプローチは、発達障害児に限らず、一般的な行動問題を抱える児童にも応用可能であることが示唆される。特に、学習環境や家庭環境でこれらの手法を組み合わせることで、より効果的な支援策となり得る。

第2節 スケートボード文化と癩癩行動改善における可能性

第1項 スケートボードと癩癩行動

(Becky Beal, 1995)は、スケートボードは、自己表現を促進する場として参加者間の仲間意識を育む特性を持つと述べており、この文化は、成功や失敗を共有することで共感を生み、個々の努力を称賛する環境を提供する。さらに、スケートボードが競争よりも協力を重視する非階層的なコミュニティであることは、情動調整や相互作用能力の育成に寄与する要因となる(Gregory J. Snyder, 2017)と述べている。一方で、癩癩行動の改善には、仲間や家族とのポジティブな相互作用が重要であることが、(別府 哲, 2018)や(石塚 誠之, 2021)の先行研究で示されている。これらの研究は、ポジティブな行動を強化し、適切な代替行動を教えることが、情動の安定や社会的つながりの向上に効果的であると報告している。

本研究では、スケートボード文化の特性と先行研究の知見を基に、KKP スクールを対象としたフィールドワークを行った。具体的には、スケートボード活動が泣くことや癩癩といった症状を抱える子どもたちにどのような影響を与え、仲間との関わりを通じて症状がどのように寛解していくのかを検証した

第2項 スケートボードと子どもの成長

スケートボード活動は、感情の安定性の向上において独自の可能性を持つことが多くの観点から示唆されている。特に、スケートボードが生み出す「挑戦の共有文化」や「仲間意識」は、参加者の感情的な安定と行動適応を支える重要な要因であると考えられる。

情動調整能力は、自分自身の感情を適切にコントロールし、社会的状況において円滑に対応する力として定義される(佐藤 幸子 et al, 2016)。この能力は、社会的適応に必要な基盤であり、特に共同活動や仲間との相互作用を通じて発達することが多くの研究で示されている。たとえば、(岬和希 & 丹治敬之, 2021)の研究では、小集団での協力的なプログラムが情動調整能力を向上させることが明らかにされており、その主な要因として「感情の共有」や「自己意識の深化」が挙げられている。この視点から、スケートボード活動は技術の成功や失敗を仲間と共有する場を提供し、感情の安定に寄与する重要な環境であると考えられる。さらに、仲間との相互作用が青年期の認知能力や視点取得(他者の立場や感情を理解する能力)の発達に重要な役割を果たすことが報告されている(玉井颯一 et al., 2018)らが述べている。スケートボード活動は、参加者が自己の取り組みや努力を評価される一方で、他者との協力や共感を求められる場でもある。このような環境は、参加者間

の相互作用を自然に促進し、感情的な安定と相互作用効果の発達を同時に支える基盤となる。特に、(堀田 亮 & 杉江 征, 2013; 馬越 亮弥 & 福岡 欣治, n.d.)は、失敗や挑戦を共有する体験は、仲間との絆を深めるだけでなく、自己効力感の向上にも寄与すると述べている。

失敗体験に対する肯定的な受容が、感情の安定性の発達に与える影響についても、多くの研究が示唆している。この視点は、スケートボード活動が持つ教育的価値をさらに裏付けるものである。(別府 哲, 2018)は、情動調整能力が内在化問題（不安や抑うつ）や外在化問題（攻撃性や衝動性）の軽減に与える影響を明らかにしており、これらの問題を抱える子どもたちにとってスケートボード活動が効果的な介入手段となる可能性を示している。具体的には、成功体験を通じて得られる自己肯定感や安心感が内在化問題を軽減し、仲間との交流によって形成される社会的支援が外在化問題を緩和する役割を果たす。また、スケートボード活動は、単なる技術習得の場を超え、情動調整能力を包括的に高める環境としての価値がある。この活動を通じて、参加者は自己の限界を受け入れると同時に、他者の立場や感情を理解する能力を育むことができる。(Fredrickson, 2001)の「拡張・形成理論」によれば、ポジティブな感情は新たなスキルの習得や社会的つながりを促進し、心理的資源を拡張すると考えられる。

第3節 諦めずに挑戦を繰り返すこと

(Zimmerman, 2013)の自己調整学習 (Self-Regulated Learning, SRL) モデルでは、学習者が主体的に目標を設定し、それに向けた計画を立て、試行錯誤しながら学習を進めることで、最終的な成果へと到達する過程が示されている。このモデルは、目標設定、計画立案、戦略的実行、自己監視、自己評価、適応的な学習行動の修正という段階から構成され、学習者が能動的に課題へ取り組むことの重要性を強調している。スケートボードスクールにおける A の痼癩改善事例をこのモデルに当てはめると、諦めずに挑戦を繰り返すことが、情動調整の向上に大きく寄与したと考えられる。

スケートボードの特徴として、技術の習得には反復練習が不可欠であり、試行錯誤を繰り返す中で少しずつ成功体験を積み重ねることが求められる。(Becky Beal, 1995)は、スケートボードの文化が「失敗を気にせず、挑戦を称賛する」特性を持つことを指摘しており、この環境が A の挑戦意欲を維持させた要因の一つであると考えられる。実際に、本研究において A は 22 か月間のスケートボードスクールを通じて、繰り返し技術習得に挑戦し続けた結果、「泣く」行動は 18 か月目までに減少し、「痼癩」行動は 6 か月目までに消失している。特に、技術習得のプロセスを見ると、A はターンやプッシュの成功回数を

着実に増やし、52 回目の来場時には同時期入会の B との競争に勝利する経験を得た。この経験は、自己効力感 (self-efficacy) の向上に直結し、スケートボードを通じた継続的な努力が自己調整学習の枠組みの中で機能したことを示唆している。(Gregory J. Snyder, 2017)は、スケートボードが個人の挑戦を支える要素を持つことを指摘しており、A の技術習得の過程は、自己調整学習の実践例として捉えることができる。

また、スケートボードは、単なる運動技能の向上だけでなく、試行錯誤を繰り返しながら最適な方法を見つけていくプロセスを含んでいる。これは、自己調整学習の概念と密接に関連しており、A は技術を習得するために自らの学習戦略を調整し、試行錯誤を続ける中で、感情のコントロール能力を高めていったと考えられる。(別府, 2018) は、情動調整の改善が痼癢の軽減につながる可能性を示唆しており、A が諦めずに挑戦し続けたことが、情動の安定化に寄与したと推察できる。さらに、技術面においても、A の行動には特徴的な変化が見られた。スケートボードスクールでは、技術の成功と失敗を繰り返しながら上達するため、「失敗すること自体が学習の一環である」という認識がある。この点において、スケートボードの学習プロセスは、従来の学校教育とは異なる特性を持ち、個人の主体的な挑戦がより重要視される環境を提供する。実際に、コーチの報告で A は、14 か月目までは失敗が続くと泣いて帰ることがあったが、15 か月目以降は諦めることなく練習を続ける姿勢を見せ始めた。これは、自己調整学習における「適応的な学習行動の修正 (self-adaptation)」の一例であり、スケートボードを通じた試行錯誤の積み重ねが、感情調整の向上につながったことを示している。

また、諦めずに挑戦を続けることは、技術的な成長だけでなく、自己評価 (self-evaluation) を通じた自信の向上にも寄与する。A は、失敗を繰り返しながらも少しずつ技術を向上させ、自らの成長を実感することで、感情のコントロール力を高めていったと考えられる。このように、スケートボードスクールでの経験は、挑戦する過程を通じて、結果的に情動の安定を促進する役割を果たした。以上の結果から、スケートボードスクールにおける A 君の痼癢改善は、挑戦の継続という要因によって、自己調整能力が向上し、結果として情動調整が強化されたと考えられる。スケートボードは、技術習得を通じて自己効力感を高めるだけでなく、試行錯誤を続ける過程で感情をコントロールする力を育むスポーツであり、その特性が A の痼癢改善に寄与したと考えられる。

よって、この諦めずに挑戦を継続してきたことが、情動の改善と考えられる。

第4節 仲間とのコミュニケーション増加と集団のまとまり

第1項 集団凝集性の定義とスケートボードスクールにおける役割

本研究におけるスケートボードスクールの活動は、先行研究で示されている集団凝集性（group cohesion）の概念と一致する。（阿江 美恵子, 1987）は、集団凝集性を「集団成員を集団に引きつける力と、集団を崩壊させる力に対して抵抗する力の総和」と定義し、個人が集団に所属し、その結束を維持する要因として重要であることを指摘している。また、（持田 和明, 2017）は、「集団凝集性の向上は、学習者の適応感を高め、協力的な環境を促進する」と述べており、この点がスケートボードスクール内での相互作用と関連する。

本研究においても、A がスケートボードスクール内で役割を獲得し、仲間と積極的に関わるようになったことが、集団のまとまりを強化した要因であると考えられる。スクールの活動を通じて、技術を身につけるだけでなく、互いに協力しながら課題を乗り越える経験を積むことで、個々の成員の結束力が強まり、結果として集団凝集性が向上したと考える。

第2項 仲間との関わりの変化とその影響

スケートボードスクールにおける仲間との相互作用が、集団凝集性の形成にどのように寄与したのかを具体的に分析する。結果 3-1（A に対する仲間の行動）および結果 3-2（A の行動）を基に、仲間同士の関わりの変化が、集団のまとまりを高めた要因を検討する。

(1) 仲間同士の励まし

スケートボードスクールでは、仲間が技を習得する過程で、互いに励まし合う場面が多く見られた。6ヶ月目と12ヶ月目には、仲間がA君に対して「次はできるよ」と声をかけるなど、成功のための心理的支援が行われていた。さらに、18ヶ月目には「大丈夫、俺もって血が出てるよ」と、転倒による痛みを分かち合う行動が確認された。（藤村 敦 & 越 良子, 2010）は、「学級内での生徒間の親密さが増すことで、集団全体の集団凝集性が高まり、生徒が安心感を得る」と指摘しており、スケートボードスクールにおける仲間同士の励ましも、この理論と一致する。

(2) 役割を持つことでの関係性の変化

16ヶ月目には、Aが後片付けを始めたことを契機に、他の仲間も自発的に参加し、共同作業が発生した。この行動は、スクール内の役割意識を強め、協力的な姿勢を促すきっかけとなった。(持田, 2017)は、「役割分担を通じた集団凝集性の向上」が情動の安定に寄与すると述べており、本研究の結果もこれと同様である。Aが特定の役割を果たすことで、仲間もその行動をともにし、より積極的に集団へ関与するようになったと考えられる。

(3) 後輩のサポートを通じたリーダーシップの発揮

18ヶ月目には、Aが後輩を応援し、成功した際に称賛する行動が観察された。これにより、スクール内の協力関係がさらに強化され、A自身の立場も変化したと考えられる。(持田, 2017)は、「感情の共有と共感的な関わりが、集団内での情動安定に寄与する」と指摘しており、Aが支援を受ける側から支援する側へと移行したことは、スクール全体の集団凝集性の向上に大きく貢献したと考えられる。

第3項 集団のまとまりを強化する要因

本研究では、仲間とのコミュニケーションが増加し、集団のまとまりが強化されたことが示された。以下の3つの要因が、スケートボードスクールの集団凝集性を向上させる要素として考えられる。

(1) 感情の共有による結束

本研究では、仲間が互いの失敗を受け入れ、励まし合う文化が形成されたことが観察された。(阿江, 1987)は、「集団成員の統制が取れることで、集団の目標達成率が向上する」と述べており、本研究のスケートボードスクールにおける仲間同士の支援行動が、学習意欲の向上や集団の安定化に寄与したと考えられる。

(2) 役割体験による責任感の向上

Aが後片付けを始め、それに続く形で他の仲間も参加したことは、「役割分担が集団の結束を高める」という(持田, 2017)の研究と一致する。役割を持つことで、個々のメンバーが自らの行動を意識し、より協力的な関係を築くことができたと考えられる。

(3) 協力的な環境による適応力の向上

(鳥井淳貴 & 中須賀巧, 2023)は、「集団凝集性の向上が学習者の適応感と関連しており、協力的な学習環境が生徒のモチベーションと自信を高める」と述べている。本研究でも、スケートボードスクールの環境が、子どもたちの適応力や挑戦意欲の向上に貢献したことが示唆される。

第4項 まとめ

本研究の結果を基に、スケートボードスクールにおける仲間同士の相互作用が、集団凝集性の向上に寄与することが明らかとなった。特に、仲間の励まし、役割の獲得、後輩のサポートという要素が、集団のまとまりを強化する要因であることが示された。(阿江, 1987)の集団凝集性の定義と一致するように、スケートボードスクール内で形成された協力的な関係が、集団の結束を高め、個々のメンバーの適応力や挑戦意欲を向上させることが確認された。今後の研究では、他のスポーツスクールにおいても同様の効果があるかを検討し、スポーツ環境における集団のまとまりが情動の安定に与える影響についてさらなる分析が求められる。

以上の点から、スケートボードスクールにおける仲間とのコミュニケーション増加が、集団のまとまりを強化する要因として機能したことが示された。

第5節 継続した家族の応援

第1項 家族の応援がAの情動安定に与えた影響

本研究では、スケートボードスクールにおけるAの情動調整に対し、家族の継続的な応援が重要な役割を果たしていたことが示された。(Ryan & Deci, 1985)は、「家族の心理的支援が情動調整を補助する」と述べており、親の関わり方が子どもの情動の安定に大きな影響を与えることが指摘されている。本研究においても、母親の応援スタイルの変化と父親の関与が、Aの癩癩の改善や感情の安定に寄与したと考えられる。スケートボードスクールへの継続的な参加の中で、Aの癩癩は次第に減少し、「泣く」行動は18か月目までに消失し、「癩癩」は6か月目までに改善された。

第2項 母親の応援スタイルの変化

(1) 叱咤激励からの笑顔の応援へ

結果 4-1 によると、母親の応援スタイルは、2 か月目から 9 か月目までの間は叱咤激励を中心とした支援が行われ、それ以降は笑顔の応援へと変化している。初期の段階では、母親は A の挑戦に対し、励ましながらも厳しく接する姿勢をとっていた。しかし、時間の経過とともに、A の成長に応じて応援のスタイルが変化し、7 か月目以降は、笑顔での応援が主体となり、ポジティブな関わりが増加した。

(石塚 誠之, 2021)は、「家族とのポジティブなつながりが情動調整能力の向上に必要不可欠である」と指摘しており、本研究においても、母親の応援スタイルが変化したことで、A の情動が安定しやすくなったと考えられる。具体的には、母親の応援が笑顔に変化したことで、A の自己効力感が向上し、情動調整がスムーズになった可能性が考えられる。

(2) 応援の質の変化と A の行動の変容

母親の応援スタイルの変化は、A のスケートボードへの取り組み方にも影響を与えた。具体的には、技の習得において失敗を繰り返しても、焦らず冷静に取り組む姿勢が強まったと考えられる。これは、母親の応援が笑顔へと変化したことにより、A 自身が心理的に安定し、自己調整能力を発揮しやすくなった結果と考えられる。

第 3 項 父親の関与と情動の安定

(1) 父親の来場と A の変化

結果 4-2 によると、父親のスケートボードスクールへの来場が 15 か月目から始まり、これが A の感情の安定に影響を与えたと考えられる。15 か月目以降、A はスクールで泣かなくなり、感情の起伏が少なくなったことが報告されている。このことから、父親の関与が A の情動調整に寄与したと考えられる。

(Ryan & Deci, 1985)は、「家族の心理的支援は、個人の情動調整能力を補助する」と述べており、父親の来場が A にとって心理的な安定をもたらした可能性がある。この安心感が A の情動調整能力の向上につながったと推察される。

第4項 家族の継続的な応援がAの情動調整に与えた影響

本研究では、母親の応援スタイルの変化がAの情動調整に寄与したことが示された。母親の応援は、初期の叱咤激励からポジティブな励ましへと変化し、それに伴いAの情動も安定していった。また、父親の関与が増えたことで、Aは家庭でもスクールでも情動の安定を示し、ポジティブな行動変容が見られた。これらの結果は、(Ryan & Deci, 1985)の「家族の心理的支援が情動調整を補助する」という理論を支持するものであり、家族の関わりが子どもの情動の安定に大きく寄与することを示唆している。Aの事例を通じて、家族の継続的なサポートが、スケートボードを通じた情動調整の向上において重要な要素であると考えられる。

よって、家族の心理的支援が情動調整を補助すると考えられる。

第5章 結論

本研究では、スケートボードスクールを通じたAの癩癩改善の具体的要因を分析した。その結果、Aの情動の安定には「仲間とのコミュニケーション増加と集団のまとまり」「継続した家族の応援」の二つが大きく寄与していたことが明らかとなった。

これらの要因は、スケートボードスクール特有の環境によるものではあるが、他のスポーツ教育現場にも応用可能な知見であると考えられる。特に、仲間との協力関係の強化や家族の継続的な心理的支援が、子どもの情動の安定に重要な役割を果たすことが示唆された。今後の研究では、他のスポーツにおける類似の事例を分析し、情動調整における最適な支援方法の確立が求められる。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、物を知る喜び、学ぶ楽しさ、そして調べる探究心を教えてくださった指導教官中村好男教授に、心より深く感謝申し上げます。中村先生の指導は、私の学術的視野を広げると同時に、研究に対する情熱を呼び起こしてくださいました。研究の進め方や考え方だけでなく、知識を得ることの喜びを日々実感させていただきました。また、平田教授からは、研究について一本の筋を通すことを学ばせて頂きました。

本研究のテーマに対する関心を私に抱かせ、研究のきっかけを作ってくくださった松下尚道氏にも、心より感謝申し上げます。その助言と支えがなければ、この研究の出発点に立つことすら叶わなかったでしょう。さらに、研究に協力してくださった、奥田文子先生、龍野頼子先生、大武聖さん、慎武宏さん、山口由紀さん、伊東知昭さん、奥山若菜さんら先輩方、様々な授業でご教授いただいた先生にもお礼を申し上げます。特に A くんとそのご家族をはじめ、川崎競輪パークの関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。皆さまのご理解とご協力が、本研究を実現可能なものとしてくださいました。最後に、私を支えてくれた家族と同期の坪井総一郎さん、今村聖子さんに感謝の意を表します。日々の励ましと応援が、私を前進させる大きな力となりました。ここに改めて、すべての方々への感謝の気持ちをしるし、この研究を締めくくりたいと思います。

参考文献;

- Anthony Pappalardo. (2020). *THE SIGNIFICANCE OF SKATEPARK CLOSURES*. Artless.
<https://anthonypappalardo.substack.com/p/the-significance-of-skatepark-closures>
- Beal, B. (1995). Disqualifying the Official: An Exploration of Social Resistance Through the Subculture of Skateboarding. In *Sociology of Sport Journal* (Vol. 12). Human Kinetics Publishers. Inc.
- Becky Beal. (1995). Disqualifying the Official: An Exploration of Social Resistance through the Subculture of Skateboarding. *Sociology of Sport Journal*, 12(3), 252–267.
<https://doi.org/10.1123/SSJ.12.3.252>
- Ben Bengtson. (2021, July 17). *North Van's Spectrum Skateboarding Society program designed for young skaters with autism - Squamish Chief*. Squamish Chief.
<https://www.squamishchief.com/highlights/north-van-skateboarding-program-designed-for-young-skaters-with-autism-3962406>
- Borden, I. (2019). *7 Skateboarding and Street Culture*.
- Evan CHARLES, & Dr. Specht, J. (2023). Factors that contribute to Teachers' Self-Efficacy for Inclusive Factors that contribute to Teachers' Self-Efficacy for Inclusive Teaching: :A Thematic Analysis Teaching: :A Thematic Analysis. *Western Graduate&Postdoctoral Studies*. <https://ir.lib.uwo.ca/etdhttps://ir.lib.uwo.ca/etd/9764>
- Fredrickson, B. L. (2001). *The Role of Positive Emotions in Positive Psychology The Broaden-and-Build Theory of Positive Emotions*.
https://www.prospectivepsych.org/sites/default/files/pictures/Frederickson_Broaden-and-build-2001.pdf?utm_source=chatgpt.com
- globalreserch9. (2024). *世界のスケートボード市場規模は2023年から2030年にかけて年平均成長率3.5%で拡大する見込み - 市場調査レポート(産業資料)の紹介ブログ*.
<https://marketdata.hatenablog.com/entry/skateboard-market/>
- Gregory J. Snyder. (2017, June 17). (99+) *Skateboarding LA: Inside Professional Street Skateboarding*.
https://www.academia.edu/37787469/Skateboarding_LA_Inside_Professional_Street_Skateboarding
- Hiwot ABEBE. (2024, December 9). *In This Addis Ababa Skatepark, Weekends Belong to the Girls | Condé Nast Traveler*. CONDÉ NAST TRAVELER.
https://www.cntraveler.com/story/the-girl-skaters-of-addis-ababa-ethiopia?utm_source=chatgpt.com
- Josh MATLOCK. (2018, September 28). *Thrasher Magazine - Real Skateboards presents Out of Sight: Treasure Island DIY*. THRASHER.

- <https://www.thrasher magazine.com/articles/videos/out-of-sight-treasure-island-diy/#more-videos>
- Kyle KUSZ. (2004). Extreme America: the cultural politics of extreme sports in : The cultural politics of extreme sports in 1990s America. *Understanding Lifestyle Sport*, 209–226.
<https://doi.org/10.4324/9780203646069-16>
- Najeeb Tarazi. (2023). *Vimeo One More Try – an experimental skate video*. Vimeo.
<https://vimeo.com/717945664>
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (1985). *Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being*. Ryan.
- Snyder, G. (2017). *Skateboarding LA: Inside Professional Street Skateboarding* (Jeff Ferrell, Ed.). NEW YORK UNIVERSITY PRESS.
https://www.academia.edu/37787469/Skateboarding_LA_Inside_Professional_Street_Skateboarding
- Thomas, B. R., Lafasakis, M., & Spector, V. (2016). Brief Report: Using Behavioral Skills Training to Teach Skateboarding Skills to a Child with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46(12), 3824–3829.
<https://doi.org/10.1007/s10803-016-2900-8>
- Wheaton, B., & Thorpe, H. (n.d.). *Action Sports and the Olympic Games; Past, Present, Future*.
<https://www.routledge.com/sport/series/RCSIS>
- Zimmerman, B. J. (2013). From Cognitive Modeling to Self-Regulation: A Social Cognitive Career Path. *Educational Psychologist*, 48(3), 135–147.
<https://doi.org/10.1080/00461520.2013.794676>
- 中坂 優太. (2023). 子どもの習い事で人気！ プロの指導者に聞いたスケートボードの教育的メリット - スポーツナビ. Sportsnavi.
<https://sports.yahoo.co.jp/official/detail/2023072400090-snaviow>
- 久崎孝浩, & 石山貴章. (2012). スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響- その研究動向と今後の方向性. 応用障害心理学研究.
https://core.ac.uk/download/pdf/296899218.pdf?utm_source=chatgpt.com
- 今泉 睦. (2024). 川崎競輪場にスケートパークが開設された経緯 † *Background and Report on the Opening of the*. https://www.jstage.jst.go.jp/article/sposun/34/1/34_1_1/_pdf/-char/ja
- 佐藤 幸子, 塩飽 仁, 遠藤 芳子, & 佐藤 志保. (2016). 子どもの情動調整と心身症状の関連.
- 別府 哲. (2018). 高機能自閉スペクトラム症幼児における情動調整の障害と発達. *心理科学*第39巻第2号. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jraps/39/2/39_58/_pdf/-char/ja
- 名護市. (2023). 名護市アーバンスポーツパーク基本計画策定業務 報告書 令和5年 (2023年) 3月名護市….

- https://www.city.nago.okinawa.jp/articles/2023111400017/file_contents/kihonkeikaku.pdf?utm_source=chatgpt.com
- 堀田 亮, & 杉江 征. (2013). 挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy/84/4/84_408/_pdf?utm_source=chatgpt.com
- 小野寺 謙. (2011). かんしゃくを示す児童に対する通常学級の級友による支援. *特殊教育学研究*, 49(4).
- 山田伸彦, & 井上雄太. (2021, September 29). 金メダル効果、スケボー人気沸騰…「格好いい」体験会や教室に殺到: 読売新聞. 読売新聞オンライン.
https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2020/20210729-OYT1T50292/?utm_source=chatgpt.com
- 岬和希, & 丹治敬之. (2021). 自閉症スペクトラム障害のある小学生か、感情の調整法略を仲間と共に考える小集団指導.
- 川崎市健康福祉局障害保健福祉部障害計画課. (2020, October 29). 川崎市: 発達障害児(者)及び医療的ケア児実態調査結果. 川崎市.
https://www.city.kawasaki.jp/350/page/0000119562.html?utm_source=chatgpt.com
- 川崎市総務企画局都市政策部統計情報課. (2024, May 9). 川崎市: 2-9 教育・・・川崎市の学校の数は?先生や児童・生徒は何人いるのかな?. 川崎市.
https://www.city.kawasaki.jp/170/page/0000009513.html?utm_source=chatgpt.com
- 持田 和明. (2017). チームスポーツ競技における集団凝集性と集団効力感を高める構成員の心理社会的能力 選手のライフスタイルおよび組織市民行動による検討一. 神戸大学大学院.
https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/D1006812/D1006812.pdf?utm_source=chatgpt.com
- 新本 惣一郎. (2012). 小学生のスポーツ実施状況の違いが特性的自己効力感に及ぼす影響.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/hatsuhatsu/2012/57/2012_1/_pdf/-char/ja
- 杉山 功明. (2022). *Industry Eye* 第63回 スポーツビジネス: スケートボードの国内定着・発展に向けた展望 | M&A | デロイト トーマツ グループ | Deloitte.
https://www2.deloitte.com/jp/ja/pages/mergers-and-acquisitions/articles/industry-eye63-20220204.html?utm_source=chatgpt.com
- 毎日新聞. (2024). 全国のスケーパーパークが3年で倍増 行政も後押しする理由は | 毎日新聞. 毎日新聞.
https://mainichi.jp/articles/20240716/k00/00m/050/023000c?utm_source=chatgpt.com
- 熊野 英一. (2020). 親子スポーツなら「スケボーがベスト」……って、なぜ? アドラー心理学から学ぶ勇気づけ術とは. *FQ Kids* VOL.03.
https://fqkids.jp/3136/?utm_source=chatgpt.com
- 玉井 颯一, 吉田 琢哉, 原田 知佳, 吉澤 寛之, 浅野 良輔, & 吉田 俊和. (2018). 仲間関係と教師の指導が中学生の共感性に及ぼす影響-2 時点の縦断データに基づく検討- *The effect of teacher's leadership on adolescent's empathy: The moderating role of peer influence.*

- 田中研之輔. (2003). *都市空間と若者の「族」文化*.
- 田中研之輔. (2015). *都市下位文化集団の相互行為に関する社会学的研究*.
- 石塚 誠之. (2021). 癩癩行動を呈した発達障害児への行動支援の効果. *北海道特別支援教育研究*.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsneh/15/0/15_23/_pdf?utm_source=chatgpt.com
- 藤村 敦, & 越 良子. (2010). 中学生における個性の類似性・異質性認知と学級集団凝集性認知との関連. <https://doi.org/10.32150/00005874>
- 阿江 美恵子. (1987). *スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究*.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/32/2/32_KJ00003391518/_pdf
- 馬越 亮弥, & 福岡 欣治. (n.d.). *青年期における過去の挫折の捉え方と自己肯定感の関連*.
- 鳥井 淳貴, & 中須賀 巧. (2023). 大学体育授業における 集団凝集性の変化と適応感の関連. *全国大学体育連合, 大学体育スポーツ学研究*. https://2020.daitairen.or.jp/dtr2020/wp-content/uploads/2022/06/dtsgk20_souki2.pdf?utm_source=chatgpt.com